

ニュートンからオイラー、ナビエ等の碩学を見ていると現実の問題を解決するために^お鋏を起し、そこから壮大な一般論を導き出しています。大学人としては研究の刺激を常にそのような現実問題の解決の過程から受けるべきだと思いますが、そのとき第VI部門論文集が問題提起の場になることが期待されます。以上自身の反省と第VI部門論文集の今後の発展をお祈りして。

(筆者・Tadashi YAMADA, 北海道大学助教授)
工学部土木工学科

虫歯と地盤改良

奥山 一典



恥ずかしながら、私の歯は虫歯だらけでサイボーグのようです。昨年夏に歯の冠がはずれ、勤務先近くの歯科医院に行ったところ、「これは抜歯する。」といわれました。もう歯を抜くのは嫌なので他に2~3の歯科医院をまわりましたが、同じ診断でした。

なんとか抜歯せずに済まないものかといういろいろ調べていますと、「船橋市の某歯科医院が保健医で腕が良い」と聞き、診察して頂きに行きました。診察室は広く、診療用の椅子が5つ並び、技工士用の大きなカウンターがあり、FM音楽が流れ、10人ほどの医師、技工士、助手の方々が黙々と優雅に働いておられました。

問題の歯は「抜かなくてよい」とのことで、その日から歯根の治療に取りかかって頂きました。歯根の治療と

は根管(神経の通る管)を細いドリル状の針で徹底的に掃除して歯ぐきの炎症を引かせるものです。これは手作業で非常に手間がかかります。とにかく5週間ほどこの治療を根気よく受けると見事に炎症が引きました。

その後、根管に薬液を注入して菌型を取られたので次回には冠をつけてもらえと思っていました。ところが冠ではなく、冠の土台を埋め込まれたのです。どういう事かと質問すると、「土台なしで冠をつけたら、将来もし冠がとれた時には、一から根の治療をしなければなりません。また、隣の歯が抜けた際には、この土台を利用して簡単にブリッジを作れます。先のことを考えて歯の治療をするのです。」といわれました。

私は地盤改良に携わっていますが、地盤改良のあり方を虫歯の治療にみた気がします。それは、

- ① 軟弱地盤の工事において最も重要な部分は地盤改良であり、目立たないがここに最大の努力を注がねばならない。
- ② 構造物の要求性能に応じた地盤改良工法を真面目に効率よく施工することで十分な効果を上げることができ、あえて奇をてらう必要はない。
- ③ 計画された構造物はもちろんのこと、将来それに代わって建設される可能性のある構造物のことも配慮した総合的地盤改良技術が重要である。

などで、心して業務にあたらねばと思います。

1本直ると昔治療した別の冠が壊れ、「あなたは私の仕事を増やす人ですね。」といわれながらも通院しているこのごろです。

(筆者・Kazunori OKUYAMA, 不動建設(株)特殊工法)
專業本部研究室

論文集内容紹介

建設業と技術開発(招待論文)

熊谷 太郎

【土木学会論文集 第373号/VI-5 pp. 5~11 1986.9】

先進欧米諸国からの技術導入に始まり、官民一体の努力によって国際的水準にまで達したわが国の土木技術の発展過程を述べている。次に、社会資本の整備や建設業の活性化など、技術開発の成果を活かすべき目標、および研究開発のために建設業がとるべき方策について述べ、最後に、来るべき21世紀社会のインパクトと技術革新に触れて、今後の建設業の技術開発の方向を示唆している。